

文化財の英語解説のあり方について

～訪日外国人旅行者に文化財の魅力を伝えるための視点～

文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議

平成28年7月

目次

1. はじめに	3
(1) 本会議の背景と目的	3
(2) 訪日外国人旅行の現状と課題	4
2. 英語解説の改善・充実のあたっての視点	5
視点1 日本語の解説を直訳せず、基本的な用語の解説を補足する等、文化財を理解する上で前提となる情報を解説に盛り込む。	6
視点2 外国人の目線でその文化財のどこに興味・関心を持つかを把握し、メリハリの利いた解説内容とする。	9
視点3 案内板やパンフレットなどの解説媒体に応じ適切に情報を書き分けるとともに、デザイン上の見やすさや景観との兼ね合いも考慮する。	10
視点4 分かりやすい解説のためには、英文執筆・翻訳を委ねることができる優れた人材の確保が重要。	13
3. 英語解説の改善・充実のための取組の推進体制	14
(1) 観光部局と文化財保護部局の連携	14
(2) 国及び地方公共団体による支援	14
4. 取組事例	20
○ 英語で伝える日本のこころ Basic Guide	21
○ せんぐう館における多言語化調査事業	23
○ 日光東照宮新宝物館	25
○ 国立能楽堂	26
○ 鶴岡八幡宮	27
○ 田辺市熊野ツーリズムビューロー	29
○ 浜離宮恩賜庭園	31
委員名簿	33
開催概要	34

1. はじめに

(1) 本会議の背景と目的

2015 年、訪日外国人旅行者数は約 2,000 万人に迫る勢いで飛躍的に増加した。政府としては、2020 年には訪日外国人旅行者数を約 2 倍となる 4,000 万人に、2030 年には約 3 倍となる 6,000 万人とすることを目標に掲げている。

明日の日本を支える観光ビジョン構想会議「明日の日本を支える観光ビジョンー世界が訪れたい日本へー」（平成 28 年 3 月 30 日）においては、観光先進国への 10 の改革の一つとして、『「文化財」を、「保存優先」から観光客目線での「理解促進」、そして「活用」へ』として、文化財を核とする観光拠点を全国で整備することや、分かりやすい多言語解説などの事業を展開することなどが挙げられている。

より多くの外国人旅行者に、我が国を訪れていただくためには、我が国の歴史・伝統文化を観光資源としていかに活用するかが重要なポイントである。

訪日外国人旅行者の関心を見ると、「訪問場所を決定する際重視する条件」として「異文化を体験できる」を挙げる回答が約半数、「歴史がある」を挙げる回答が約 4 割と大勢を占める（平成 26 年度文化庁調査）。その一方で、訪日外国人旅行者の滞在期間中の過ごし方を見ると、「日本の歴史・伝統文化体験」を経験した割合は 2 割強であり、「日本食を食べる」「ショッピング」などに比べて低い水準にあるのが現状である（平成 26 年度観光庁調査）。訪日外国人は「異文化や歴史に興味はあるが実際には体験できていない」というのが現状であり、この現状を改善するには、日本の歴史や文化を体験できる場の外国人旅行者への発信をより一層強化することが求められる。

とりわけ、分かりやすい解説の充実・多言語化については、文化財を核とする観光拠点の整備に必要不可欠なものである。現在でも大多数の文化財について何らかの解説は整備されているが、日本人の視点で見ても内容の専門性が高く、初めてその地を訪れる観光客にとって「分かりやすい」ものとなっているかという視点での点検が十分に行われていない。今後、外国人の方に楽しんでいただくという目線からの検証やノウハウの蓄積が急がれる。

これまで観光庁においては「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」を、文化庁においては「文化財の効果的な発信・活用ガイドブック」を作成し、好事例の発信を行ってきた。しかし、個別の文化財の価値を訪日外国人旅行者が理解できるようにするためには、前者のような画一的なガイドブックでは対応が困難であり、また後者が紹介する事例は訪日外国人旅行者に特化したものではなかった。

そこで、地方公共団体の教育委員会、観光部局、及び文化財所有者が文化財の英語

解説を行う際に参考となるような優良事例集をとりまとめることを目標に、観光庁と文化庁が合同で「文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議」を立ち上げて検討を行った。

（２）訪日外国人旅行の現状と課題

現在、訪日外国人旅行者の訪問先は、三大都市圏のいわゆる「ゴールデンルート（※）」が中心であるが、地方創生の観点から、それ以外の地域への訪問をいかに増大させられるかが重要な課題である。

訪日外国人旅行者を国・地域別に見ると、2015年の１年間でアジアからの訪日外国旅行客は約1,500万人（前年からの伸率62.1%）なのに対し、ヨーロッパからの訪日外国旅行客は約87万人（前年からの伸率26.0%）となっている。アジアからの訪日外国観光客に比較して少ないヨーロッパからの訪日観光客については、今後の伸び代が期待される。

ヨーロッパからの旅行客の特徴は、彼らの多くが個人旅行（FIT）だということである。また、ヨーロッパからの観光客はアジアからの観光客に比べ、日本の歴史・伝統文化体験に関心が高い傾向がある。観光客を増やし、かつ彼らをリピーターにするため、三大都市圏以外の地域も含めて個人旅行（FIT）を多く受け入れるとともに、地域の文化財を観光資源として積極的に活用する視点を持ち、旅行者のニーズにあった解説を行うことで、満足度の高い経験をしていただけるような対策を講じていくことが今後必要と考えられる。

（※）ゴールデンルートとは、一般に東京都から愛知県、京都府、大阪府を結ぶ観光ルートのことを指す。

【訪日外国人旅行の現状と課題に係る基礎的なデータ】➡ 参考資料 P. 16・17

2. 英語解説の改善・充実のあたっての視点

外国人旅行者が日本の文化財を訪れたときに分かりやすい解説がなければ、文化財の由縁や歴史が十分に伝わらない。そのため、訪日外国人旅行者は文化財の本当の価値を理解することができず、その文化財を適切に評価することもできない。

このためまずは、できるところから外国語解説の整備を進めていくことが取組の第一歩であるが、その際には、訪日外国人旅行者にも分かりやすい解説となるよう工夫し、「見て感動し、その価値を理解していただく」ことに主眼を置くべきである。具体的には、以下の四つの視点が重要である。

視点1 日本語の解説を直訳せず、基本的な用語の解説を補足する等、文化財を理解する上で前提となる情報を解説に盛り込む。

視点2 外国人の目線でその文化財のどこに興味・関心を持つかを把握し、メリハリの利いた解説内容とする。

視点3 案内板とパンフレットなどの解説媒体に応じ適切に情報を書き分けるとともに、デザイン上の見やすさや景観との兼ね合いも考慮する。

視点4 分かりやすい解説のためには、英文執筆・翻訳を委ねることができる優れた人材の確保が重要。

視点1 日本語の解説を直訳せず、基本的な用語の解説を補足する等、文化財を理解する上で前提となる情報を解説に盛り込む。

＜チェックポイント＞

☐ 訪日外国人旅行者にとって十分に理解できる内容となっているか。

文化財の解説を見聞きする上で、日本人であれば大半の人が当然に理解できる固有名詞が数多く登場する。外国人旅行者にとって見聞きしたことがないものを直訳しても分からないため、これらに適切に解説を加えなければ理解が難しい。

例)「江戸時代」・・・いつか? 「将軍」「卑弥呼」・・・誰か?
「暖簾」「御輿」・・・何か? (いつ何に使われているか?)
「関ヶ原の戦い」・・・いつのどんな出来事か+日本史上どんな意味をもつか

このため、単に日本語の解説を英文に直訳しようとするとかかなり分かりづらくなる。これを防ぐためには、外国人観光客に理解が難しそうな単語がないか確認し、以下のような方策をとることが求められる。

① 適切な英語に置き換える

(直訳するのではなく、例えば「暖簾」→「Traditional shop curtain」のように意識する)

② 文章を足したり注釈を加えたりする

(その単語への詳細な解説を加えることで文化財の理解が深まる場合)

また、全国的に共通して使用される「神社」「仏教」などの言葉は、ある程度統一感を持った解説が有効である。地域において頻出の固有名詞があれば、その表記も統一する。特に、ローマ字は様々な表記がありうるので混乱しないよう統一する。



情報が多すぎたり少なすぎたり，専門的すぎたりしないか。

解説する内容の専門性が高すぎたり，長すぎたり，複雑すぎる文章となっていないか（情報の過多）に注意する。

例）明暦7年の火災後の造修では，夫須美神と速玉神を祀る相殿と証誠殿を区切る廻廊・理門が取り払われ，仏堂や護摩堂・三重塔といった仏教関係の堂塔が・・・

⇒ 英語解説作成時には全てを英訳しようとするのではなく，より概括的な解説に置き換えることも一案。

また，全体の一部しか解説が整備できない場合などに文化財全体に関する重要な情報が抜け落ちていないか（情報の欠落）に注意する。

祭礼や伝統芸能などを紹介する場合は，参加・見学が可能なものなのか，実施時期や場所，参加方法などの情報も欠落させないように留意する。



文化財の価値や背景等を理解の上，何を解説するかを整理できているか。

分かりやすい解説を作るには，解説の作成者が文化財の価値や背景を理解している必要があり，文化財や日本文化に知見があり英文の作成能力の高い人材の確保が必要となってくる（詳細は視点4へ）。

また，平易な解説にしようと思うがあまりに，見れば分かることを解説に加える（例えば「この絵には竹と虎が書かれています」）と，解説自体の意味を失う。より理解を深めてほしい視点，伝えたい観点（「竹や虎がどのような意味をもって登場しているのか等」）をよく整理しておく必要がある。

加えて，複数の兜や刀を並べるなど同種のものの展示などは，外国人の目線では同一のもののように見えることが多く，「何が見所か（何を覚えてもらいたくて展示しているのか）」をよく吟味する必要がある。

なお，文化財全体に関する重要な情報に加えて，外国人観光客の関心が高い，歴史的背景，文化的背景に関する情報を盛り込むことも有効と考えられる。

§トピック§ 英文作成作業の進め方のアイデア

ポイントは「日本語から翻訳せず英語で文章を作る」こと

- ・ 十分な知識と文章力に長けた英語を母国語とするいわゆるネイティブに、翻訳ではなく執筆をお願いする。解説する文化財を実際に見て理解を深めてもらうことが本来は前提だが、それが難しければ映像や写真を多く共有する。
- ・ 日本人が文章を作成する場合も、最初から英語で作成した上で、説明として成立しているかネイティブの確認を受ける。
- ・ どうしても日本語から翻訳してもらう場合は、翻訳者に編集の権限を多く与える。
翻訳してもらう日本語の文章を作成する際には、そもそも日本人にとっても一般的に理解できる内容かを検証してみることが重要。

■参考■ 注釈による補足のイメージ

「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」

(平成 26 年3月国土交通省・観光庁) P23 参照

補足内容のイメージ

一定の条件を満たす解説文章についてはこのような補足を加えることによって、訪日外国人旅行者の理解を助ける

屋形船
Yakatabune
(roofed pleasure boat)

A yakatabune is a traditional flat bottomed vessel. Partying on such boats is a custom that dates back centuries...

川を航行する屋形船に多くの人々が乗船している様子を撮影したもの。
船頭が2人、・・・

Here we see a number of people enjoying a trip on a river.
There are two boatmen, ...

上図における「一定の条件を満たす解説文章」とは

1. 展示物等にてモチーフとされた日本特有のモノや事象、出来事などについて解説する。
2. 日本について知識のない訪日外国人旅行者の視点を意識した記載内容とする。
3. 展示物等に外国の文化や歴史との接点があり、それに言及することが、訪日外国人旅行者が我が国の歴史・文化を正しく理解し、共感・理解を持つことに資する場合には、その文化・歴史についての説明を積極的に盛り込むものとする。
4. 文章量としては、主たる解説文についての補足であることから、数行程度を想定するが、必要性により適宜判断する。

視点2 外国人の目線でその文化財のどこに興味・関心を持つかを把握し、メリハリの利いた解説内容とする。

＜チェックポイント＞



ターゲットとする外国人がその文化財のどこに興味・関心を持つ

かを把握の上、メリハリの利いた解説項目・内容としているか。

一般に、日本人と外国人では文化財を鑑賞しているときに、どこに大きく関心を寄せ、興味を持つかが異なることが多い。特に、日本人が改めて疑問に思わないことも、素朴に関心を持つことが多い。

例) 神社の彩色はなぜ朱色なのか？ 鳥居は何のためにあるのか？

このため、外国人の方に協力していただき、外国人目線でどういったことが理解できず、どういったことを知りたいのかを把握した上で各種の取組を進めることが有効である。

例えば、モニターツアーや訪日外国人旅行者へのアンケート調査などにより、外国人の目線から、解説しようとする文化財のどこに関心を持つかを把握することが有効である。

§トピック§ 訪日外国人の多様なニーズに応じた、多様な解説の充実

- ・ 一口に訪日外国人と言っても、訪れる人にどの程度日本の歴史・文化についての知識があるか、またどの程度詳しく解説を得たいと思っているか、様々である。
- ・ 多様なバックグラウンドを持つ訪問者に対して、文化財の何を見ていただき、そのためにはどの程度のボリュームや専門的解説が適切かを見極め、発信につなげることが重要。

【解説媒体に応じた情報量の書き分け】 ➡ 視点3

視点3 案内板やパンフレットなどの解説媒体に応じ適切に情報を書き分けるとともに、デザイン上の見やすさや景観との兼ね合いも考慮する。

＜チェックポイント＞



案内板とパンフレットでは用途・情報量が異なる。解説媒体による用途等の違いを捉えているか。

英語解説に限らず、解説に当たっては解説の媒体によって用途や盛り込むことのできる情報量が異なるため、用途の違いを的確に捉え情報を書き分けることが必要である。

また、「展示は2カ国語表記、音声ガイドは5カ国語で対応」のように、多言語対応を媒体で分担することも有効である。

それぞれの媒体に応じた用途イメージと留意事項は場面によって異なるが、一般的に考えられる整理は以下に示すとおり。

＜案内板等＞

全来訪者が見るものであり基本的な情報を掲載。掲載できる情報量は少なくなる場合が多い。デザイン面では景観との兼ね合いの調整が必要である。

＜パンフレット・ガイドブック＞

案内板よりも詳細な情報を掲載できる。周遊コースを入れるなど文化財を巡る際の地図としての用途の場合、個々の文化財の紹介についても順路を意識した掲載順序とすると読みやすい。また、持ち帰って読むことを意識したガイドブックにする場合、絵や写真とともに、文化財の由来や価値等について詳細に説明する。多言語対応とする場合は、一つのパンフレットに多言語を掲載するのではなく、言語ごとに作成すると、掲載する情報量が少なくなる。

＜音声ガイド＞

文化財を鑑賞しながら詳細な解説を聞くことができる。耳で聞くことを意識し、過度な情報・文字で見ないと分からない難しい単語の使用を控える。制作時には、文語（書き言葉）ではなく口語（話し言葉）にすること、ストーリー性を意識するなど面白い内容になるよう工夫すること、発音が正しいか収録時に担当者がきちんと立ち会うことなどにも留意する。

<通訳ガイド>

文化財を鑑賞しながら個々に観光客の関心にあわせて解説。文化財の解説に加え日本文化全般や旅行者の出身国との関係等も付加する。（☞ 通訳案内士について視点4参照）

<ガイダンス施設>

ガイダンス施設があれば、背景となる知識・情報をあわせて発信でき、より理解を深めていただくことが可能となる。展示や映像なども活用し、訪日外国人旅行者の興味関心を深める場として充実・強化すれば、満足度の向上に効果を発揮する。

□ デザイン上の工夫，統一は図られているか。

案内板・パンフレットなどの媒体のデザインや表記の統一を図る（トータルデザインを整える）ことが必要である。

また、事務的に使うフォントがそのまま使われているケースがあるが、フォントの選択やグラフィックデザインにも英語圏ではこだわりがあることが多い。英字のデザインに慣れたデザイナーにフォントなどのデザイン基準を決めてもらうと良い。

§トピック§ ピクトグラム統一の例

「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」（平成26年3月国土交通省・観光庁）において、多言語対応の統一性・連続性の確保の観点から、「案内所」「お手洗い」等のピクトグラム一覧を掲載している。



■参考■ 解説媒体に応じた対象・解説の内容のイメージ

項目 媒体	対象・解説の内容
案内板 解説板	<p>【対 象】全来訪者</p> <p>【解説の内容】（施設入口） 文化財の位置など地理的要素について説明。 その施設主体の文化財・歴史的背景を説明。 （個別文化財）文化財の由来や価値を分かりやすく説明。 ※ 重要なものについては、外国人向けに日本人が重要視している価値等を付加。</p>
パンフレット	<p>【対 象】施設を周遊する際の地図として使用したい者 文化財に関心があり、その情報を持ち帰りたい者</p> <p>【解説の内容】 ○ 基本的な周遊コースを表示。 ○ 文化財について、絵や写真とともに、その由来や価値等を簡潔に説明。</p>
音声ガイド	<p>【対 象】文化財を鑑賞しながら解説を聴きたい者 説明板には載りきれない情報を得たい者</p> <p>【解説の内容】施設の入り口で貸出を行い、個別の文化財の前でそれを鑑賞しながら、背景となる歴史や文化などについて説明。</p>
通訳案内士	<p>【対 象】文化財を鑑賞しながら解説を聴きたい者 自分の関心に合った情報を得たい者</p> <p>【解説の内容】文化財そのものの解説に加え、現代の日本における価値や旅行者の出身国との関係について付加。</p>
ビクターセンター・資料館等	<p>【対 象】文化財に深く興味を持っており、ある程度時間を費やしてでも、当該施設・文化財を知りたい者</p> <p>【解説の内容】パンフレットなどでは記載し切れない内容（歴史やその文化財の作成過程などのさらに細かい内容）を、大型パネルや映像、レプリカなどを用いて、さらに細かく解説。</p>

平易

詳細

視点4 分かりやすい解説のためには、英文執筆・翻訳を委ねることができる優れた人材の確保が重要。

＜チェックポイント＞

☐ **解説の作成に当たり、ノウハウ・知見を有する人材が確保できるか。**

これまでの「視点」で見てきたとおり、日本の歴史等を知らない訪日外国人旅行者でも理解可能な解説を作成するためには、以下の点に留意する必要がある。

- ・文化財の価値や背景等を理解し、複雑すぎず長すぎない分かりやすい文章にする
- ・旅行者の目線に立って、実際の現場でどのようなことに関心が高く、何が評価されているかを理解し、解説の作成・改善に反映する
- ・解説媒体に応じて情報を書き分け、外国人から見て洗練されたビジュアル、読みやすいフォントを用いた目を引くデザインにも気を配る 等

このような対応をするためには以下のような人材の確保が必要である。

- * ネイティブスピーカーであり、文章作成能力が高い
- * 日本の歴史・文化に関する知識がある
- * 英字を用いたデザインを手掛けており、見やすく目を引くデザインができる

このような優秀な人材をいかに確保するかが、分かりやすい解説整備において大きな課題である。上記のすべての要素を一人で満たす人材の確保は難しいと想定されるが、その際には特定の一人に限ることなく、地域の多様な人材による複数の視点でのチェックをかけることも有用である。例えば、地域で活躍する外国人の方（日本在住で日本文化や文化財に知識・関心のある方、JET プログラム（※1）参加者・元参加者など国際交流事業等に携わっている方など）や海外で日本の歴史や文化を研究している方などに協力をお願いすることは一案として有効である。

また、外国人旅行者と現場に行くことが多く、現場の状況や外国人のニーズを最も良く把握していると思われる、通訳案内士（※2）又は地域限定通訳案内士やボランティアガイドの活用も有効である。これら確保した人材について、専門性や正確性を向上するための研修を実施するなど、育成に関する取組も必要である。

（※1）JET プログラム：語学指導等を行う外国青年招致事業（The Japan Exchange and Teaching Programme）の略で、外国青年を招致して地方自治体等で任用し、外国語教育の充実と地域の国際交流を図る事業。

（※2）通訳案内士：観光庁長官の行う通訳案内士試験に合格し、都道府県知事の登録を受けた者。

3. 英語解説の改善・充実のための取組の推進体制

文化財は、大半を個人または地方公共団体が所有・管理している。本書でこれまで紹介した内容を広く普及するためには、文化財部局や観光部局などの行政機関はもとより、文化財を所有・管理している方々へも広く理解していただくことが必要となる。

(1) 観光部局と文化財保護部局の連携

現在の行政機関では、観光部局は首長部局、文化財保護部局は教育委員会に所属していることも多く、うまく連携ができず文化財を観光資源として活用できていない例が見られる。

文化財を観光資源として活用したい観光部局と、文化財の保存にも責任を負っている文化財保護部局では、そもそもの行政目的に異なる部分があることは言うまでもない。しかしながら、文化財への理解を深め、関心を持つとともに後世に伝えていくためにも、文化財の積極的な「活用」を図っていくことが必要であり、観光部局と文化財保護部局の緊密な連携が求められる。文化財は地域を活性化し、地域を元気にすることにつながる貴重な資源である。外国人観光客の獲得に向けた文化財の活用についても、地域全体の活性化に生かす方策をともに検討していくことが必要である。

そのためには両者が連携して英語解説の充実など観光コンテンツとしての質の向上を行い、文化財の魅力発信を強化することが重要である。

(2) 国及び地方公共団体による支援

解説の改善は所有者の役割であり、自発的に取り組んでいただく必要がある。

しかし、所有者が解説を改善するにあたっては、人材確保が困難であったり、財政的な理由で独力での対応が困難な場合があるため、国及び地方公共団体に対し、文化財所有者等が自発的に行動するために必要な支援を求められることがある。

国における支援の手法としては、以下のようなものがある。

- 英語解説の制作によって発生する財政負担軽減のため、財政的支援（「観光地魅力創造事業」「文化財総合活用戦略プラン」（後述）など）の支援事業についての情報提供を行い、これらを利用してできる事業の内容を周知し、普及させる。
- 解説の内容については、一般化してマニュアルを作成することは困難であるため、取組事例をモデルケースとして紹介する。

支援事業の紹介

地域資源を活用した観光地魅力創造事業(観光庁)

【参考】平成 28 年度予算額 3.4 億円

地域の観光資源を活かした地域づくり施策と、マーケティング、受入環境整備等の観光振興のための施策を一体で実施する地域を支援。

応募主体：市町村、観光協会、交通業者等により構成される協議会

補助率：全体費用の 1/2 相当の事業費を国が負担

事業フロー

取組の評価を踏まえた計画の見直し

計画の策定
(数値目標、事業内容等)

マーケティングの実施

地域の魅力を高める取組の実施

滞在コンテンツ
の充実・強化

来訪需要の喚起

来訪者の利便性
等向上

外国人受入環境
整備

国によるパッケージ支援

○計画策定に係る費用
○マーケティング費用
○滞在コンテンツの企画作成費用
○二次交通の整備に係る実証実験等の費用
○受入環境整備、おもてなしの向上に係る費用

等

文化財総合活用戦略プランの強化(文化庁)

日本の歴史・伝統文化情報発信推進

外国人旅行者のニーズに合わせた文化財の解説作成, 情報発信等を行うモデル事業を支援。

応募主体: 地方公共団体

補助率: 定額

予算額: 平成 28 年度予算 21.6 億円のうち 0.3 億円

- 外国旅行者のニーズにあった文化財(情報)の調査
- 文化財の外国語での正確で分かりやすい解説の作成
- 地域の文化財・歴史に関する外国語(多言語)による情報提供
- 地域の歴史・伝統文化を解説するガイドの育成 等



モデル事業の成果を反映

地域の文化遺産次世代継承事業 (18.1 億円)

応募主体: 地方公共団体, 実行委員会など

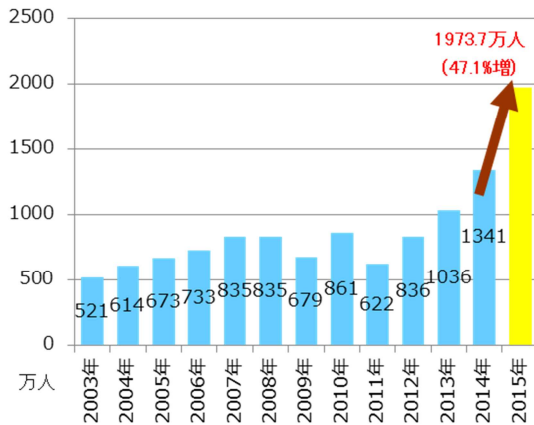
補助率: 定額

対象事業: 情報発信, 人材育成, 人件費, 調査研究など

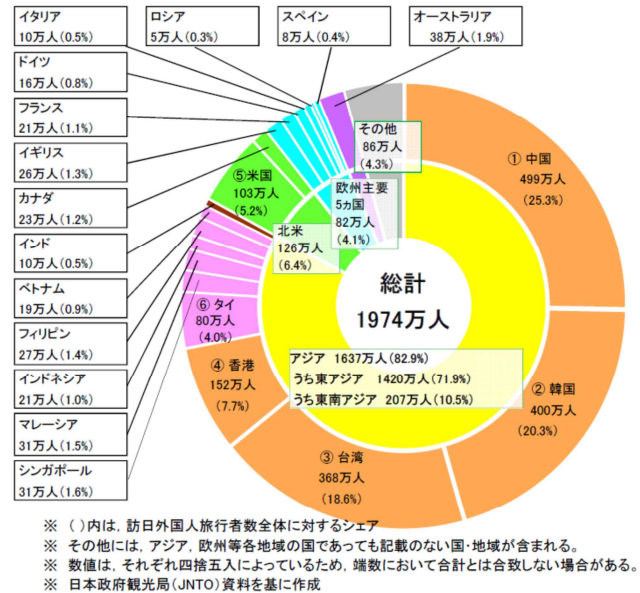
など文化財を活用するための各種支援策(文化財総合活用戦略プラン【28年予算 96.3 億円】)を実施

参考資料 1 訪日外国人旅行者の状況

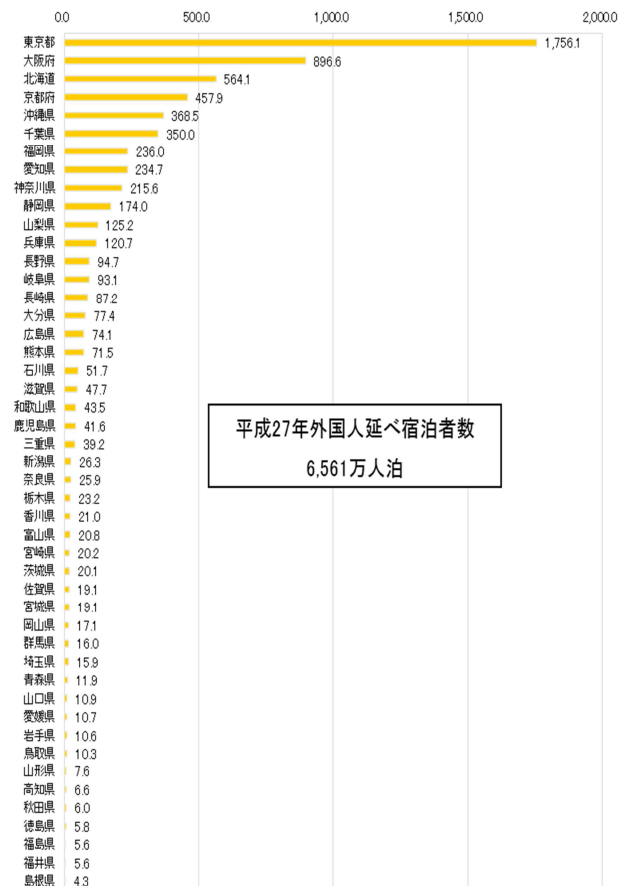
(1) 訪日外国人旅行者数の推移



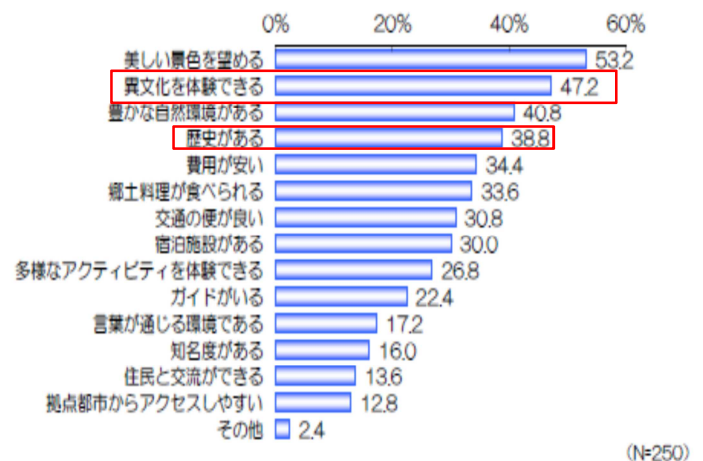
(2) 2015 年訪日外国人旅行者数及び割合 (推計値)



(3) 訪日外国人延べ宿泊者数 (2015 年)



(4) 訪日外国人が訪問場所を決定する際重視する条件



平成 26 年度 文化財の効果的な発信

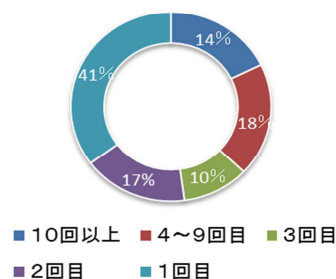
活用方策に関する調査研究事業 (文化庁) より

(1) 個人旅行(FIT)への対応・リピーターの確保

訪日外国人旅行者の3分の2がリピーター。

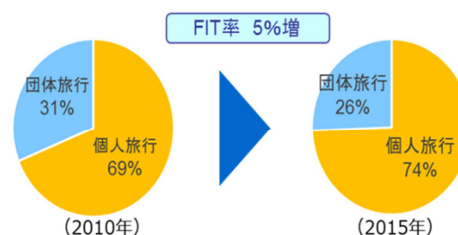
その旅行形態として団体旅行から個人旅行(FIT)の比重が大きくなってきている。

訪日外国人旅行者の訪問回数
2015年(1,974万人)



(出典)平成27年訪日外国人消費動向調査を基に作成

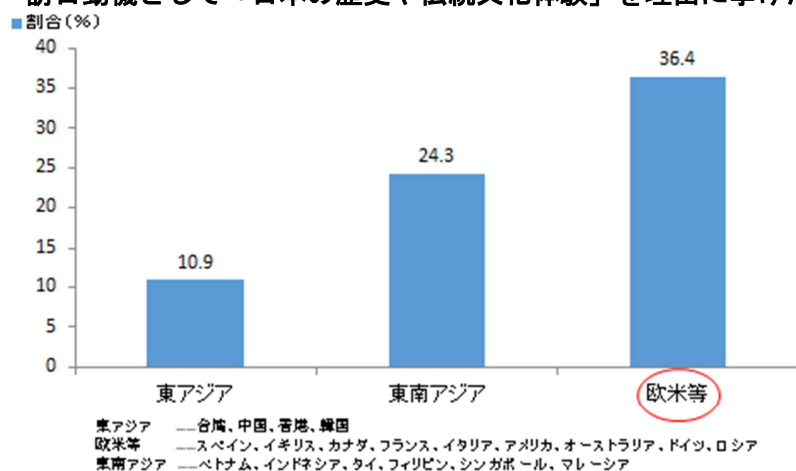
訪日外国人旅行者の形態



(出典)平成27年訪日外国人消費動向調査を基に作成

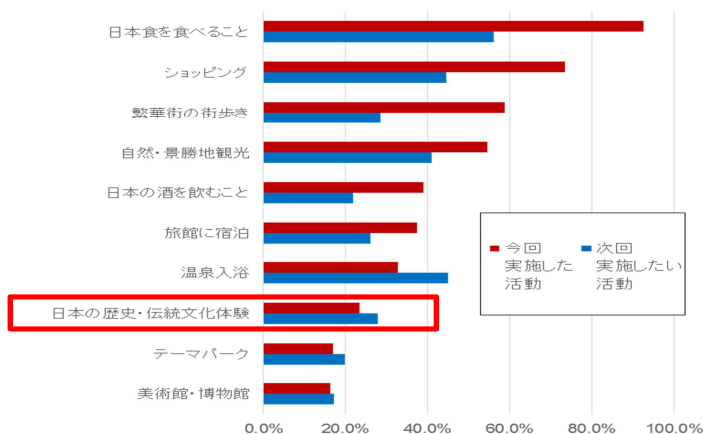
(2) 外国人旅行者の訪日動機

訪日動機として「日本の歴史や伝統文化体験」を理由に挙げた者の割合



(出典)平成27年訪日外国人消費動向調査を基に作成

訪日外国人旅行者が実施した・したい活動



訪日外国人旅行者は最初の訪日の際には、日本食、ショッピング等への関心が高いが、その後歴史・文化への関心が高くなる。

(出典)平成27年訪日外国人消費動向調査(観光庁)

4. 取組事例

○ 英語で伝える日本のこころ Basic Guide	21
○ せんぐう館における多言語化調査事業.....	23
○ 日光東照宮新宝物館.....	25
○ 国立能楽堂.....	26
○ 鶴岡八幡宮.....	27
○ 田辺市熊野ツーリズムビューロー.....	29
○ 浜離宮恩賜庭.....	31

英語で伝える日本のこころ Basic Guide (神社本庁)

取組の概要

昨今、日本を訪れる外国人の数も増え、神社や神道について説明する機会が増えているが、専門的な知識が必要なため、正確な英訳は困難である。こうした問題意識から、神社本庁では平成25年3月、神社や神道などの基礎的な情報を外国人視点でできるだけ平易な表現で説明した「SOUL of JAPAN」を発行。

その後「SOUL of JAPAN」を基に、単純に分かりやすく翻訳するだけでなく、その内容がなぜそのように書かれているのか、またどのように訳したらよいかを、日本文化や神道に関する情報を交えながら解説した「英語で伝える日本のこころ Basic Guide」を発行。

取組内容



○ 宮司等が神社等を訪れた外国人に神道の用語について、分かりやすく説明できるよう、まずは、基本となる用語の解説を作成。

○ その際、単に英語解説文を記載するのみでなく、どうしてそのような英文になっているか、その意味や考え方まで記載。

1 What is Shinto? -1

①

* Observing the Shinto faith means worshipping ancestors as * guardians of the family. It also means showing respect for * the myriad *kami*—a word that corresponds to 'deity' in English—residing in the natural world. There are *kami* of the mountains, and *kami* of the sea. *Kami* are all around us, in every thing and every person. They may be worshipped anywhere, but many people visit * Shinto shrines, called *jinja*, to pray, * cleansing their hands and mouth at the entrance to purify the body and mind.

②

語句の解説

indigenous 固有の、土着の / faith 信仰 / integral 不可欠な、必須の / ancient 古代の、大昔の / foundation 土台、基礎 / yearly 例年の / shrine 聖堂、廟 / observe 儀式などを行う / worship 崇拝する / ancestor 先祖、祖先 / guardian 保護者、守護者 / myriad 無数の / correspond to 対応する / deity 神、神霊 / reside 住む / pray 祈る / cleanse 洗う / purify 汚れを取り除く

解説

③

③ Observing the Shinto faith

直訳：神道の信仰を行うということ

解説：動詞observeにはさまざまな意味があり、本書では全体の意味を考えて「(儀式などを)行う」をあてています。observeは比較的固い表現で、have faith (信仰を持つ)と言うより実践していることを強調できます。ただ、「信仰を行う」という表現は日本語として不自然なので、本書ではより自然な日本語として「神道の信仰を持つ」と訳しています。

なお、ここでは初出ということでShintoの後にfaithを付け、信仰であることを強調しています。faithの類語のreligionは体系化・組織化された信仰という意味があり、「神道の信仰」はもう少し広い信仰心を表しているため、faithを用いているのです。

④ guardians of the family

直訳：家族の守護者

解説：guardianは「保護者」や「後見人」などという意味です。本来「神」という意味は含みませんが、本書ではご先祖様が見守ってくれているという感覚を大切に「守り神」と訳しています。ただし、guardian deityとまでしてしまうと「ご先祖様」という身近な感覚が消えてしまうため、あえてguardianとだけ表現しているのです。

なおキリスト教では、個人を守り導く天使を「守護天使 (guardian angel)」、特定の職業や地域を守る聖人を「守護聖人 (patron saint)」と言い、翻訳の参考になります。

⑤ the myriad *kami*—a word that corresponds to 'deity' in English—

直訳：無数の神 (英語で 'deity' に相当する単語)

解説：deityは、力の象徴として崇拝される超自然的存在を指し、多神教の神を意味する語として使われることがあります。ただ、あまり一般的な言葉ではありません。また古代ローマの宗教のようにアニミズム的な、物に宿ったり場所を支配したりすると考えられた神霊をnumenと呼びますが、deity以上に一般的な単語ではありません。

『SOUL of JAPAN』では、神道における「神」の訳語として誤解の元となる「god」は使用せず、deityに相当すると注釈を付け、以降は全て「kami」で統一しています(18ページ「About Shinto」参照)。

④

直訳してみると？

神道は日本人の土着の信仰です。それは大昔から日本文化の不可欠な部分となってきた生き方であり、考え方です。それは幸福を願うために日本人が神道の廟へ訪れる元日の訪問をはじめとした、例年のライフサイクルの基礎となっています。

神道の信仰を行うということは、家族の守護者としての祖先らを崇拝するということを示します。それはまた自然の世界に住んでいる無数の神(英語で「deity」に相当する単語)に敬意を示すということも意味します。山の神、そして海の神がいます。神は私たちの周りの全て、あらゆるものやあらゆる人の中にいます。それらはどこでも崇拝されるかもしれませんが、多くの人は神社と呼ばれる神道の廟へ祈るために訪れ、体や心の汚れを取り除くために入口で彼らの手や口を洗います。

翻訳は次ページ

⑤ 神道とは？ -1

神道は日本固有の信仰です。それは太古から日本文化の一部として伝えられてきた生き方であり、考え方です。また、一年の幸福を祈願する初詣に始まる年中行事の元にもなっています。

神道の信仰を持つということは、祖先を家祖の守り神として祀るということを示します。また、自然の中に存在する数多くの神を敬うことでもあります。山の神、海の神をはじめ、私たちの周り全てのものや人に神が宿ります。神を信仰する場所はどこでも構いませんが、多くの人は神社を訪れて祈ります。そこでは心身を清めるため、入口で手を洗い、口を漱ぎます。

⑥

開 About Shinto

一年の中のいろいろな祭り

神社では年間を通じ、地域の風習や神社の由緒などに基づいた多種多様な祭りが行われています。今日、全国の神社で共通して行われている大きな祭りとしては、春の祈年祭と秋の新嘗祭が挙げられます。毎年2月頃にその年の五穀豊穡を祈るのが祈年祭、11月に収穫を祝い神々に感謝する祭りが新嘗祭で、現代では11月23日が勤労感謝の日として祝日になっています。その他にも神社では、今上天皇の誕生日を祝う天長祭や、半年毎に罪穢れを祓う6月・12月末日の大祓など、多くの祭祀・行事が催されています。地域独特の祭りもあるので、近くの神社に尋ねられてはいかがでしょうか。

① 本文

冒頭に基本用語を外国人にも理解しやすく解説した英語文を掲載。

② 語句の解説

英語解説に携わる者の用に供するため、使用頻度が高い英単語の説明を掲載。

③ 解説

本文の重要な個所について、その意味や考え方をさらに詳しく解説。

④ 直訳

①の本文を、文法通りに直訳した場合の日本語文を掲載。

⑤ 翻訳文

①の本文の内容を、筆者の意図した内容に翻訳した日本語文を掲載。

⑥ コラム

神社や神道についてのさらに詳しい事柄や、英語に関する知識などの豆知識を紹介。

せんぐう館における多言語化調査事業（平成24年度）（伊勢神宮）

取組概要

伊勢神宮外宮域内の「せんぐう館」では、音声ガイド端末で多言語解説を整備。多言語端末には、4言語の音声として、「せんぐう館」およびそれに関連した伊勢神宮の情報を収録。



ペン型の音声ガイド端末で多言語の音声を再生できる。併せて制作した展示解説シート上のアイコンにペン先を当てると音声再生される。

取組内容

伊勢神宮外宮域内の「せんぐう館」に多言語音声ガイド機器を導入するに当たり、在日外国人を対象にモニターツアー、アンケート調査を行い、以下の四つの観点から事業効果を測定。

① 音声ガイド機器

導入した音声ガイド機器が使いやすいか、不満はないか。

② 解説内容

解説箇所や量は適切か。

③ 興味・不明点

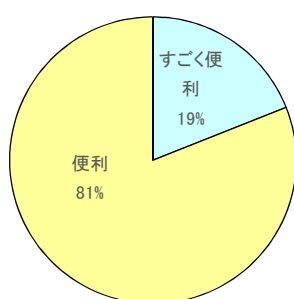
外国人がどのようなことに興味を持つか、理解できなかったことは何か。

④ 欲しい解説

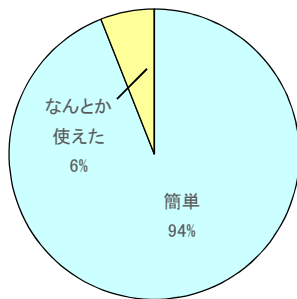
外国人から見てどこが解説が足りなかったか。

音声ガイド機器

音声機器は解説を理解するのに便利か



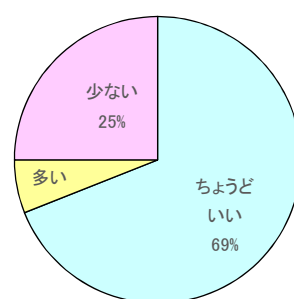
音声ガイドの操作について



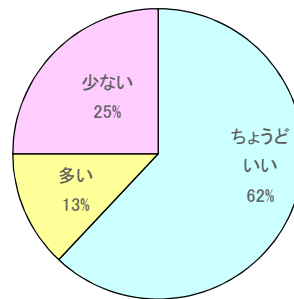
○ 音声ガイド機器自体については、概ね好評な回答であり、外国人旅行者に解説するためのツールとして、有用であると判断している。

解説内容

解説箇所の数について



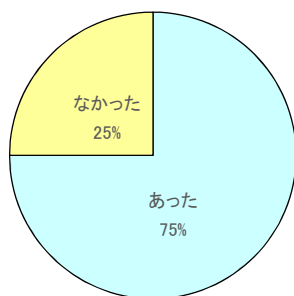
音声解説の量について



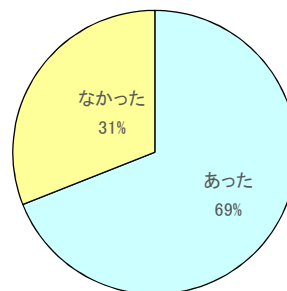
○ 「ちょうどいい」という意見が半数以上を占めているが、「少ない」という意見も1/4を占めており、数、量ともに増やしてもよいと判断している。

興味・不明点

興味を持った展示・解説はあったか



分からなかった展示・解説はあったか



興味を持った展示・解説(例)

- ・実物大の神殿 ・木材の切り方 ・正殿の構造 ・伝統的な手法で神宝を製造する

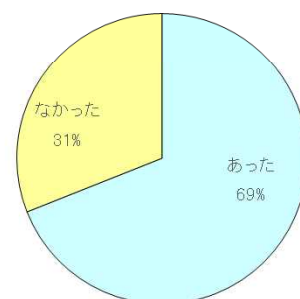
分からなかった展示・解説(例)

- ・人や地名の名前が難しかったので、一部の説明が分かりにくかった。補足説明が欲しい。
- ・全体的に内容が難しいので、もっとやさしく、面白く説明してほしい。

欲しい解説

興味を持った、解説が欲しい項目では、「神」「神道」「正殿」などの基本的用語に関するものや、建物の構造や周りの池、絵画などの日本人があまり興味を持たない部分が分からないとの回答が多い。

他に欲しい解説はあったか



(例)

- ・神 ・通路に掛けてある絵画 ・池について説明してほしい。
- ・正殿の構造 ・神道
- ・分かりやすい言葉で神宮の日本人にとっての重要性に関して、説明が足りない。
- ・ほかの神宮の紹介が欲しい。
- ・どうして神宮の中に入れないのか。糸でかこまれた石は何か？

ポイント

- アンケート内容を解説手段と内容に分け、外国人は「どのような内容に興味を持つか」「どのような言葉が分からないか」などといった点を調査。
- このことから、日本人には比較的当たり前のことや気にならないことに外国人は興味を持ち、固有名詞などは説明がないと理解できないことが分かった。

日光東照宮新宝物館（日光東照宮）

経緯・取組

昭和43年に開館した旧宝物館の老朽化への対応、東照宮四百年式年大祭を記念して、平成27年に新宝物館が建立された。日光東照宮には年間20～30万人の外国人旅行者が訪れるため、外国人を迎え入れるのにふさわしい施設を目指して設計された。訪れた旅行者がより東照宮のことを理解できるよう、神社の由緒、建造物の修理の解説、関連文化財、徳川家康の生涯などについて、解説板、年表、映像コンテンツ等の多様な媒体を用いて解説している。また、そのほとんどが日英併記となっている。

英語の解説がなかった旧宝物館では、入館者数は年間5万人程度であったが、解説整備後の新宝物館には開館から9か月で約16万人が訪れるなど、入館者数は大幅に増大した。



解説の工夫（解説板）

日本の歴史を知らない外国人にも理解できるよう、英語解説では日本語解説以上に詳しく記載。

例えば、日本語の解説では「徳川家康公が関ヶ原の戦いの際に着用されたと伝えられる。」と関ヶ原の戦いについて特段の説明はないが、英語の解説では、「in 1600, after which Japan was unified under the Tokugawa shogunate.」と付け加えられ、関ヶ原の戦い後に家康が天下統一したこと（関ヶ原の戦いは「天下分け目」の重要な戦いであったこと）が分かるよう配慮されている。



多様な解説

東照宮にまつわる知識・情報を発信するため、多様な媒体による解説を整備。



通年では展示できない縁起絵巻5巻を全編アーカイブ化している。タッチパネル上の主要な場面に触れると日英2か国語の解説が出てくる。



昭和40年まで実際に使用されていたみこしの展示。日英併記の解説板に加え、映像の解説も存在。



宝物館の入り口には、東照宮全体をはじめとして複数の説明を、入館者が選択して聞くことのできるタッチパネルの案内板がある（日本語音声と英語字幕）。



実際に使用する道具等とともに、建造物の修理についても解説がある。写真は彩色工程についての解説（日英併記）。



徳川家康の生涯を紹介した約20分のアニメーションをシアターで見る事ができる。全編に英語のテロップを入れて上映している。

シアターではこのほか、バーチャルリアリティの「国宝陽明門」も上映。

国立能楽堂

取組内容

国立能楽堂では、能楽に対する理解の促進を図るとともに外国人等の利用環境の整備を図るため、舞台芸能では日本で初めてのパーソナル・タイプの座席字幕装置を導入した。現在では、ほとんどすべての自主公演で日本語・英語の2か国語による字幕表示を実施している。



英語字幕台本の作成は外部に委託しているが、日本語の字幕データをそのまま訳してもらうのではなく、1度平易な現代日本語に書き下した上で、その現代日本語を英訳させるという段階を踏んでいる。また、字幕の作成者が変わっても作成者による差異が生じないように、「字幕台本ガイドライン」を独自に策定している。

表現上の工夫

「字幕台本ガイドライン」(抜粋)

- ・観劇に必要な最低限の知識を提供し、過度の説明は避ける。
- ・曲目はローマ字(英訳)の順で表示する。例:Tsuchigumo (The Ground Spider)
- ・能の専門用語は英語の一般的な表現で説明し、ローマ字による名称表示は必要以上に行わない。例:agemaku → curtain
- ・(狂言において)役者の一目瞭然な動きに関する説明は省く。

能「頼政」の英訳作業例 The Noh Play: Yorimasa

日本語字幕	外国語訳用現代日本語	英語
「これは遠国より出でたる僧にて候」	「私は都から遠く離れた国から来た僧です」	Monk: I'm a monk from a land very far from Kyoto.
「憂き時も近江路や」 「三井寺指して落ち給ふ」	頼政の霊「辛い思いをしながら」 地謡「近江の三井寺に向けてお逃げになったのです」	Yorimasa: Mournfully, Chorus: He fled to Mii Temple in Omi.

狂言「文山立」の英訳作業例

Kyogen: Fumi Yamadachi(The Cowardly Bandits)

台本	日本語字幕	外国語訳用現代日本語	英語
これはいかなこと何とした		槍男「どういことだ」 弓男「どうした」	Spearman: What happened? Bowman: What's wrong?
どれへやらやったわごりよはどれへやったぞ	(追っていたはずの旅人の姿が見えなくなったことに気づいて立ち止まる)	槍男「旅人はどこかへ行ってしまった。逃がしてしまったのか」	Spearman: The traveler is gone. You let him get away?

その他の取組

子供向け公演の際には、子供向けに平易な言葉を表示する「こどもチャンネル」を導入した3チャンネル表示を行い、外国人向け鑑賞教室の際には4チャンネル(日・英・中・韓)の表示を行うなど、観客層に合わせた字幕を用いてきめ細かい対応を行っている。



取組内容

外国人旅行者に対応するため、鶴岡八幡宮教学研究所に国際課を設置。ホームページやパンフレットの英訳に取り組んでいる。英語版のパンフレットは日本語版とは別の構成で作成しており、日本語版にはない補足情報を追加するほか、観光客が訪れる順路に沿って物件の解説を作成するなど、訪日外国人目線の構成となっている。



解説の例

- 日本語の内容に補足を加えたり、専門的な内容は思い切って落とす等の工夫をすることで、簡潔で分かりやすい解説になっている。

ホームページにおける鶴岡八幡宮全体の説明

当宮は康平6年(1063)源頼義が奥州を平定して鎌倉に帰り、源氏の氏神として出陣に際してご加護を祈願した京都の石清水八幡宮を由比ヶ浜辺にお祀りしたのが始まりです。



Tsurugaoka Hachimangu was established by Minamoto Yoriyoshi (源 頼義, 988–1075) in 1063. He built a power base for the Minamoto warrior clan in the east of Japan after the suppression of a rebellion started by clans in the North East of Japan in 1051. He returned to Kamakura, and built a small shrine for the Hachiman kami (the Japanese word for Shinto deities) near the coast to give thanks for success in suppressing the rebellion. The Hachiman kami was regarded as the protector kami of the warrior class.

(「鶴岡八幡宮HP」(<http://www.hachimangu.or.jp/index.html>
<http://www.tsurugaoka-hachimangu.jp/>)より引用)

(は言換え は補足説明)

ホームページ

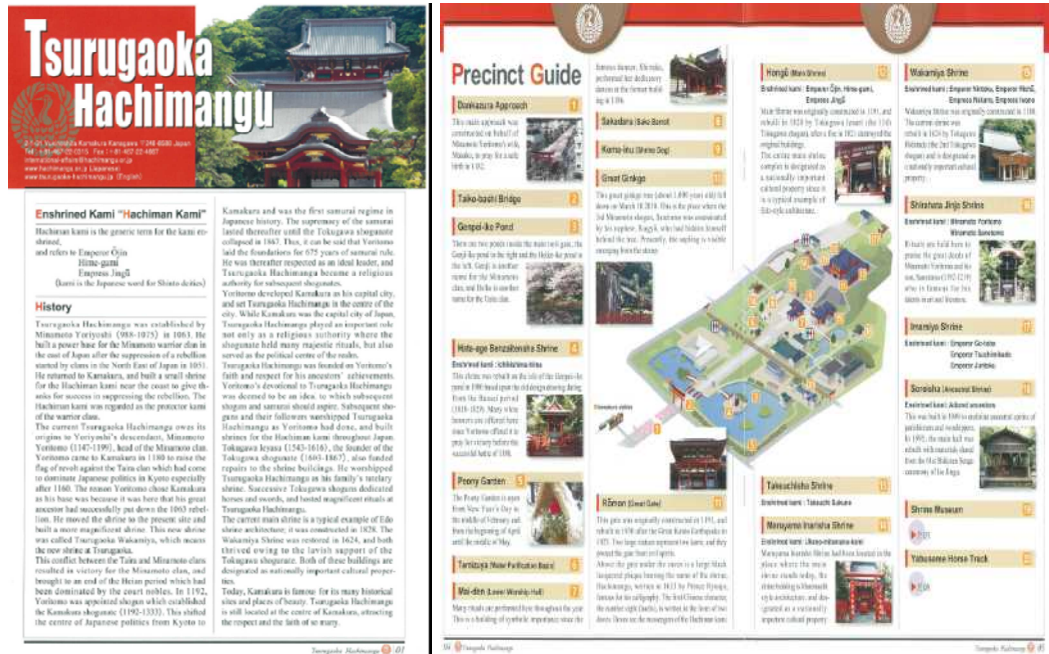
ホームページでは神道そのものの解説や、各月の行事の解説などを掲載している。

七夕行事についての紹介のページ



パンフレット

英語版のパンフレットでは、はじめに鶴岡八幡宮全体の歴史等を紹介し、個別の物件については、拝観者がたどるルートに沿って解説を付している。日本語版が専門的であるのに比べ、外国人にも分かりやすい解説になっている。



日本語版パンフレットの冒頭にある「本殿」の解説

本殿

Main sanctuary of
Tsurugaoka Hachimangu

本殿は幣殿、拝殿を連ねた流権現造で、廻廊が左右に伸びて本殿を囲む形になっている。建物内外の上部壁面には鳥獣草木が描かれ、精巧な彫刻も施されている。細部にわたり見事な彩色が施された現在の建物は文政11年(1828)、徳川十一代将軍家齊の造営である。平成8年(1996)に国の重要文化財に指定された。



「流権現造」、「廻廊が左右に伸びて本殿を囲む形になっている」といった構造的な解説、いつ重要文化財に指定されたのかなど、学術的な内容を含めて詳細に解説。

英語版パンフレットで12番目に紹介される「本宮」の解説

Hongū (Main Shrine)

12

Enshrined kami : Emperor Ōjin, Hime-gami, Empress Jingū

Main Shrine was originally constructed in 1191, and rebuilt in 1828 by Tokugawa Ienari (the 11th Tokugawa shogun), after a fire in 1821 destroyed the original buildings.

The entire main shrine complex is designated as a nationally important cultural property since it is a typical example of Edo-style architecture.



日本語版のパンフレットでは、鶴岡八幡宮の中で重要な物件である「本殿」が敷地内どこにあるのか分からず、解説もやや専門的である。

英語版では本殿を持つ「本宮」についての簡潔な解説にとどめている。

田辺市熊野ツーリズムビューロー

経緯・取組内容

2006年に設立された田辺市熊野ツーリズムビューローは、市内の五つの観光協会で構成された田辺市観光協会連絡協議会を発展的に移行させた団体である。当初からいわゆるネイティブの目を持って情報発信しようと考え、JET プログラムに参加し、ALTとして3年間田辺市で過ごしたブラッド氏を雇う。彼の経験を基に看板のローマ字表記の仕方やデザインの統一、熊野本宮館における展示表記の内容の見直しを行った。

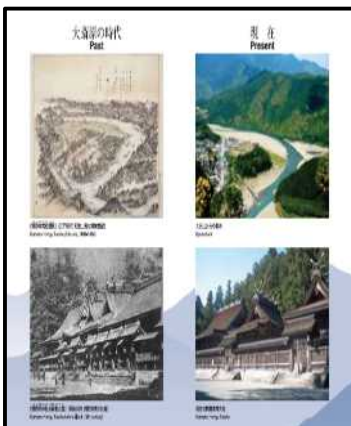


ブラッド トウル 氏【経歴】

カナダ・マニトバ大学卒

日本では、「愛・地球博カナダ館」ホスティングスタッフ、観光ガイドやスキーリゾートでインストラクターなどを経験。1999年より、旧本宮町（現田辺市）にてALTとして3年間勤務した後、帰国。その後、2006年に田辺市熊野ツーリズムビューロー発足が設立された際に、同国際観光推進員に就任。

解説の工夫



熊野本宮大社

「熊野権現垂迹縁起」、『長寛勘文』所収によれば、熊野の神は中国から渡来し、九州→四国→淡路島→紀伊切部山→新宮神倉とめぐり、最後に本宮大斎原に天降ったとある。熊野の神が史書に初めて登場するのは奈良時代末で、社殿に関する記述が見えるのは11世紀のことである。その後、幾度か造修が行われているが、基本的な社殿配置の変更はなかったようである。しかし、明暦7年の火災後の造修では、夫須美神と速玉神を祀る相殿と証誠殿を区切る廻廊・理門が取り払われ、仏堂や護摩堂・三重塔といった仏教関係の堂塔が再建されていないなど、それまでと異なる姿となっている。その後、明治22年の水害により、上四社が現社地に遷座し、中・下四社は旧社地の石造の小さな祠に祀られるという姿になった。

日本人でさえ理解が難しい解説文を
外国人目線で分かりやすく書き換え

Kumano Hongu Taisha

Kumano Hongu Taisha has gone through many changes over the centuries due to natural and human influences, including fires, floods, and political and social developments. The pavilions have subsequently gone through periodic rebuilding, but its architectural style has remained consistent for over 800 years. In 1889, a tremendous flood of unprecedented size destroyed the shrine completely, and the salvaged materials were used to reconstruct some of the pavilions at its present location. Four of the 12 deities were moved to the new site, and the remaining 8 are enshrined in two stone monuments at the original shrine ground, known as *Oyunohara*.

看板のローマ字表記を統一

ブラット氏の着任以前は、地域内で同一の固有名詞が統一されておらず、異なる訳ごとに別の建物なのかと外国人旅行者が混乱することがあったが、ローマ字の固有名詞をヘボン式の表記に統一した。

また、「熊野古道」を表す看板のデザインも統一するとともに、訪日外国人旅行者にとって最も必要な情報である「どこが熊野古道なのか」が理解できるよう「(NOT)KUMANO KODO」の英語を併記した。

Kana	Hepburn	Kunrei-shiki	Nihon-shiki
う	u	u	u
おう, おお	o	o	o
し	shi	si	si
しゃ	sha	sya	sya
しゅ	shu	syu	syu
しょ	sho	syo	syo
じ	ji	zi	zi
じゃ	ja	zya	zya
じゅ	ju	zyu	zyu
じょ	jo	zyo	zyo
ち	chi	ti	ti
つ	tsu	tu	tu
ちゃ	cha	tya	tya
ちゅ	chu	tyu	tyu
ちょ	cho	tyo	tyo
ぢ	ji	zi	di
づ	zu	zu	du
ぢゃ	ja	zya	dya
ぢゅ	ju	zyu	dyu
ぢょ	jo	zyo	dyo
ふ	fu	hu	hu

固有名詞の統一

大塔

- ・ Ootou
- ・ Outou
- ・ Ohtoh
- ・ Otou
- ・ Otoh
- ・ Ohto
- ・ Ôto
- ・ Ôto

熊野本宮大社

- ・ Kumano Great Shrine
- ・ Hongu Shrine
- ・ Hongu Grand Shrine
- ・ Hongu Taisha Shrine
- ・ Kumano Great Taisha
- ・ Kumano Hongu Taisha

など19通り



Otoに統一



Kumano Hongu Taisha (Shrine)に統一

デザインの統一



浜離宮恩賜庭園

取組内容

(公財)東京都公園協会が管理している浜離宮恩賜庭園は、外国人旅行客が多いため(平成27年度137,814人、入園者全体の18%)多言語での対応が求められる場面が多い。そのため、英語が話せる職員をサービスセンター(公園の入り口の総合案内所)に配置するとともに、東京都公園協会が独自に創設した資格である「都立庭園ガイドライセンス」を取得したボランティアによる英語のガイドツアーを実施している。そのほか、5か国語6言語のパンフレットと、5言語6種類対応のスマートフォン及びスマートデバイス用アプリも用意。

音声ガイド



平成28年4月1日からは、スマートフォン及びスマートデバイス用アプリ、Tokyo Parks Naviを導入した。これは地図機能とコース表示機能、音声(オーディオガイド)・動画などのデータが搭載されており、庭園内の解説があるスポットに近付くと音声ガイドが自動的に流れる。

内容はストーリー性に富んでおり、例えば大手門の解説中には門が開く音、鴨場の説明中には鳥の声が収録されており、実際にどう使われていたのか、現在の姿からは読み取れない情報が盛り込まれている。



鴨場

案内板



庭園の複数の入り口に、日本語の案内版とは別に、英語だけで書かれた庭園全体の解説(沿革等)と、主要な見どころを記した案内板がある。

周囲の雰囲気との調和を考えたデザインとした。



復元建物についてはその復元工程や技術についても解説板を作成。

文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議 委員名簿

(五十音順：敬称略)

氏名	団体名
デービッド・アトキンソン	小西美術工芸社 代表取締役社長
岩橋 克二	神社本庁 教化広報センター 広報国際課長
落合 偉洲	全国国宝重要文化財所有者連盟 理事長 久能山東照宮 代表役員
エリック・スミス	自治体国際化協会 JET プログラム事業部 プログラムコーディネーター
高野 明彦（座長）	国立情報学研究所 コンテンツ科学研究系教授
野田 博明	全日本社寺観光連盟 理事
萩村 昌代	日本観光通訳協会 会長
平岡 昇修	全国国宝重要文化財所有者連盟 副理事長 東大寺 執事長
三重野 真代	京都市 産業観光局 観光 MICE 推進室 MICE 戦略推進担当部長
マリサ・リンネ	京都国立博物館 フェロー国際交流担当

【オブザーバー】

齊藤 孝正 文化庁文化財部文化財鑑査官
 宮田 繁幸 文化庁文化財部伝統文化課主任文化財調査官
 朝賀 浩 文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官
 佐藤 正知 文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官
 豊城 浩行 文化庁文化財部参事官（建造物担当）付主任文化財調査官
 下間 久美子 文化庁文化財部参事官（建造物担当）付文化財調査官

【事務局】

文化庁文化財部伝統文化課
 観光庁観光地域振興部観光資源課

文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議 開催概要

第1回 「文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議」

- 日 時： 平成27年10月14日(水)14:00 ～ 16:00
- 場 所： 中央合同庁舎3号館(国土交通省) 10階 海事局第6会議室
- 議 題： (1)検討の背景及び議論の進め方について
(2)文化財の英語解説に関する取組の紹介, 意見交換
(3)ヒアリング候補の選考について
(4)その他

第2回 「文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議」

- 日 時： 平成27年12月16日(水)13:30 ～ 15:30
- 場 所： 中央合同庁舎7号館(文部科学省 東館) 5階 第1会議室
- 議 題： (1)前回議事要旨の確認
(2)優良事例のヒアリング
・田辺市熊野ツーリズムビューロー
・日光東照宮(新宝物館)
・妙心寺退蔵院
(3)報告書骨子について
(4)その他

第3回 「文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議」

- 日 時： 平成28年2月22日(月)15:30 ～ 17:30
- 場 所： 中央合同庁舎3号館(国土交通省)8階 観光庁国際会議室
- 議 題： (1)報告書について
(2)その他